

「反知性主義」批判は安倍政権批判になりうるか

斎藤美奈子

最近、「反知性主義」という言葉をよく聞く。「現代思想」二月号の特集は「反知性主義と向き合う」だし、「文学界」七月号の特集は「反知性主義」に陥らないための必読書50冊」だ。

反知性主義なる語は安倍政権批判とセットで使われることが多い。たとえば佐藤優「知性とは何か」は（本書は、日本の政治が急速に反知性主義化していることに対する危機意識を背景に書かれたものである）としたうえで、次のように述べる。

「安倍晋三政権が軌道に乗ってきたから、私はあえて「反知性主義（anti-intellectualism）」という言葉を用いて、現在の国内政治や外交を批判することになっている。反知性主義を大雑把に定義するならば、「実証性や客観性を軽視もしくは無視して、自分が欲するように世界を理解する態度」である。／（略）／もともと、反知性主義者が、自分の物語に閉じ籠もっているだけならば、他者に危害は加えないが、政治エリートに反知性主義者がいると、国内政治、国際政治の両面でたいへんな悪影響を与え、日本の国益を毀損することになる。彼が反知性主義の例としてあげるのは（歴史修正主義（特にナチズムに対する再評価）、ナシヨナリズム、国語力の低下など）であ

り、反知性主義が国益を毀損した具体的な事例は、麻生太郎財務大臣の「ナチスの手口に学べ」発言であり、解釈改憲による集団的自衛権行使容認の閣議決定であるという。

我々が得たりの人も少なくないのだろう。でも、反知性主義って言葉、なんか引つかかるよね。

安倍政権のなるものを批判するのに「反知性主義」という言葉は有効なのだろうか。「反知性主義者」と批判された反知性主義者は反省するだろうか。「知性のある私」が「知性のない者」を批判する。そういうやり方をしてきたから、日本の左派は嫌悪され、「情」で勝負の右派に人が流れたんじゃないのか。

つまり「バカが世の中を悪くする」ってこと？
というモヤモヤした気分を抱えたまま、内田樹編「日本の反知性主義」を読んでみた。（集団的自衛権の行使、特定秘密保護法、改憲へのシナリオ……あきらかに国民主権を蝕み、平和国家を危機に導く政策が、どうして支持されるのか？ その底にあるのは「反知性主義」の跋扈（略）日本の言論状況、民主主義の危機を憂う

気鋭の論客たちによるラディカルな分析」とカバー袖に印刷されていること、九名の論客が寄稿したこの本もまた、安倍政権批判の文脈で企画された本のような。

だが、完成したこの本は、版元（编者？）の意図とはまるで異なる奇つ怪な論考集になってしまった。うっかり執筆を引き受けてしまった論者にとっては、とんだ災難だったにちがいない。

「反知性主義」という言葉はリチャード・ホフスタッター「アメリカの反知性主義」（一九六三年）に由来する。「日本の反知性主義」もその書名を踏襲したと語る内田樹「反知性主義者たちの肖像」にしてからが、何をいいたいのか、よくわからないのである。いわく（個人的な知的能力はせいぶん高いようだが、その人がいるせいで周囲から笑いが消え、疑心暗鬼を生じ、勤労意欲が低下し、誰も創意工夫の提案をしなくなるといふようなことは現実にはしばしば起こる。（略）私はそういう人を「反知性的」とみなす。いわく（反ユダヤ主義に見られる「陰謀史観」は、反知性主義の典型的ななかたちである。私はそれを「反知性」と判定する）。反知性主義

の何たるかをめぐって哲学的な論議が続くが、言葉の周りをうろろするだけ。要するに、だから何？

白井聡「反知性主義、その世界的文脈と日本的特徴」は、内田論文よりは多少生産的かもしれない。反知性主義とはホフスタッターがいう（知的な生き方およびそれを代表するとされる人びとにたいする憤りと疑惑）だとしたうえで、白井は（大衆民主主義社会では、反知性主義の心情が社会的潜在的な主調低音となる）ことに注目し、今日、反知性主義が活気づいている要素を、八〇年代から進行していたネオ・リベラリズムによる新しい階層社会の出現と、対立を避ける天皇制国家の構造に求める。「下流」「B層」「ヤンキー」などと呼ばれる反知性的な「新しい下層階級」が現在の政治権力のもっとも重要な票田だという説は、たしかに説得的ではある（が、よく考えれば、さほど珍しい指摘でもない）。

版元（编者？）の意向にもっとも沿った論文は、平川克美「戦後70年の自虐と自慢」だろうか。平川は（まったく自分が知らないことを、あたかも知っているかのように日本国民に向けてレクチャ

好評発売中

神霊を生きること、その世界

インド・ケララ社会における「不可触民」の芸能民族誌
竹村嘉典著 激動する社会、経済、宗教的文脈の中で、神霊を担う人びとの伝統の技や知識がいかに変容し、変容されているのか。 5000円

脱植民地主義のベトナム考古学

「ベトナムモデル」「中国モデル」を超えて
僕 寛司著 植民地時代の考古資料を復元、分析。古代とは誰のものかを問い直す、大胆にして緻密なメタ考古学の試み。 6000円

東アジア海域文化の生成と展開

（東方地中海）としての理解
野村伸一編著 日中韓を結ぶ「東シナ海」。それは自在な海路であり、通底し、響き合う地域文化を豊かにはぐくむ母なる海であった。 6000円

中国社会における文化変容の諸相

グローバル化の視点から
韓 敏編 現代中国躍進の原動力＝グローバル化。そしてローカルの現場を再構築する人々。ベクトルの交錯から中国社会を読み解く。 5000円

森羅万象のささやき

民俗宗教研究の諸相
鈴木正崇編 文化人類学・宗教学・民俗学の多様な視点から、地域社会と人々が織りなす「いま」に迫る渾身の42論考。鈴木正崇退職記念として編まれた論集。 12000円

風響社

〒114-0014 東京都北区田端 4-14-9
〒03-3828-9249 (価格は本体)
URL: http://www.fukyo.co.jp

「〜する安倍晋三と、〈知性というものを徹底的に軽蔑するというポーズ〉をとる橋下徹を比較し、反知性的な立ち位置が大眾の煽動に役立つことを熟知した橋下の政治手法を分析する。また安倍や橋下が自虐史観と呼ぶ歴史の検証こそ知性的な態度であることをドイトと比較しながら語ってみせる。たしかに腑には落ちる（が、これとわざわざ知性／反知性という用語が必要とは思えない）。

ほかの論者もみな困惑気味だ。高橋源一郎は「日本の反知性主義」（たつたつけ？）について書いてほしいといわれたんだけど、ぜんぜん書けない（「反知性主義」という言い方の中に、どうしても含まれてしまう）あんたたちは反知性だけれど、こっちは知性だよ」というニュアンスが好きになれない」とボヤいているし（「反知性主義」について書くことが、なんだか「反知性主義」っぽくてイヤだな、と思ったので、じゃあなにについて書けばいいのだろう、と思っ

て書いたこと）、赤坂真理は「実は「反知性」という言葉が私にはわかりません」と告白し（「どんな兵器よりも破壊的なもの」、想田和弘は「正直、僕は何か月もの間、筆が進まなくて苦しんできた」と吐露したうえで（体験的「反知性主義」論）、それぞれ四苦八苦しな

「知性とは何か」「反知性とは何か」に思いをめぐらせている。でもさ、やっぱり歯切れは悪いわけね。

「こうまでして「反知性主義」にこだわることに、いったいどんな意味があるのだろうか。手の込んだやり方で「バカが世の中を悪くする」といいたいだけ、みたくに見えるんですけどね。

「反知性主義」とはバカの別名どころか「反体制」「反権力」「反権威主義」「御用学者批判」などにむしろ近い態度のことなのだ。だとすると、知性（権威）の側からバカを論評する「知性とは何か」「日本の反知性主義」こそ、悪しき知性主義の見本ってことになりませんか？ むろん佐藤優や内田樹は、日本を代表する知性の持ち主であるから、本来の反知性主義が何かは重々承知のうえで「あえて」意味をスラシ、劣化する日本社会に警鐘を鳴らしたかったのであろう。あろうけれども、日本の知識人はバカの悲しみに鈍感なところがあるからな。

内田本の中で反知性主義（本来の意味での）にもっとも近いのは、小田嶋隆「いま日本で進行している階級的分断について」だろう。（東京の場末の町で生まれ育った者にとって、「反インテリ志向」は、あらかじめの宿命として気が付くとビルトインされている「天賦」のようなもの）と語る小田嶋は「ヤンキー」なる語を無自覚に振り回すインテリ層を痛烈に批判し、「反知性主義をめぐる議論は、知性云々を軸にした対立であるよりは、「分断」のストーリーなのだと思っている」と書く。それは学歴や偏差値や戦後民主主義という名の「優等生思想」によってもたらされる分断なのだ。

反知性主義（今日の文脈での）を批判するインテリ層は、まず自分の胸に手をあてて、知性や教養が嫌われた理由をマジメに考えるべきではあるまいか。（反知性主義に対抗するために重要なのは、知性を復権することだ。それは主に読書によってなされる）（「知性とは何か」などと説いたところで、何の足しにもならないのだ。

をかけたのが、森本あんり「反知性主義——アメリカが生んだ「熱病」の正体」だった。日本の論壇で最近よく聞く「反知性主義」は（どちらかと言うと）社会の病理をあらわすネガティブな意味に使われることが多いが、もともとは「単なる知性への反対というだけでなく、もう少し積極的な意味を含んでいる」と森本はいう。

この本が描き出すのは「アメリカ化（土着化）したキリスト教」ともいえるべき「信仰復興運動（リバイバルズム）」を中心とした反知性主義の歴史、換言すればアメリカの精神史である。

アメリカに入植したピューリタンは厳格な聖書解釈を重んじる関係上、もともと高学歴者が多く、極端な「知性主義」の社会だった。牧師の養成を目的に設立された東部のエリート大学などが、知性主義の代表例だ。しか、知性は容易に権威と結びつき、リベラルアーツ教育によって培われた知のピラミッド構造は「知性による権威の階級的な固定」をもたらす。こうした硬化化した既存の知性主義に、ラディカルな平等主義の立場から異を唱えたのが、反知性主義の源流たるリバイバルズムだった。反知性主義は折々に民衆を煽動するヒーローを生み出し、近年ではエンターテインメント化、ビジネス化することで、形を変えつつ生きながらえている。

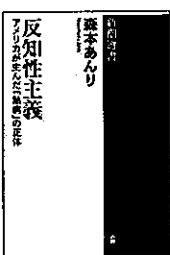
反知性とは（最近の大学生が本を読まなくなったとか、テレビが下劣なお笑い番組ばかりであるとか、政治家たちに知性が見られな



「知性とは何か」佐藤優、祥伝社新書、2015年、820円＋税



「日本の反知性主義」内田樹編、晶文社、2015年、1600円＋税



「反知性主義——アメリカが生んだ「熱病」の正体」森本あんり、新潮選書、2015年、1300円＋税

（民主権を蝕み、平和国家を危機に瀕くはす）政策に支持が集まる国。（これは先の戦争のとき、知性的にも倫理的にも信頼しがたい戦争指導部に人々が国の運命を託したのと同じく、国民の知性が（とりわけ歴史的なものの見方が）総体として不調になっているからでしょうか）（「まえがき」に引用された編者による依頼文）。そんな問題意識の下に書かれた9人の論文（と1本の対談）を集めた論考集。知性／反知性に関する多様な考えかたは学べる。

（アメリカでは、なぜ反インテリの風潮が強いのか。なぜキリスト教が異様に盛んなのか。なぜビジネスマンが自己啓発に熱心なのか。なぜ政治が極端な道徳主義に走るのか。そのすべての謎を解く鍵は、アメリカで変質したキリスト教が生み出した「反知性主義」にあった）（カバー裏より）。無批判に使われている反知性主義について一から解説した好著。著者は1956年生まれ国際基督教大学学務副学長（ちなみに男性）。